

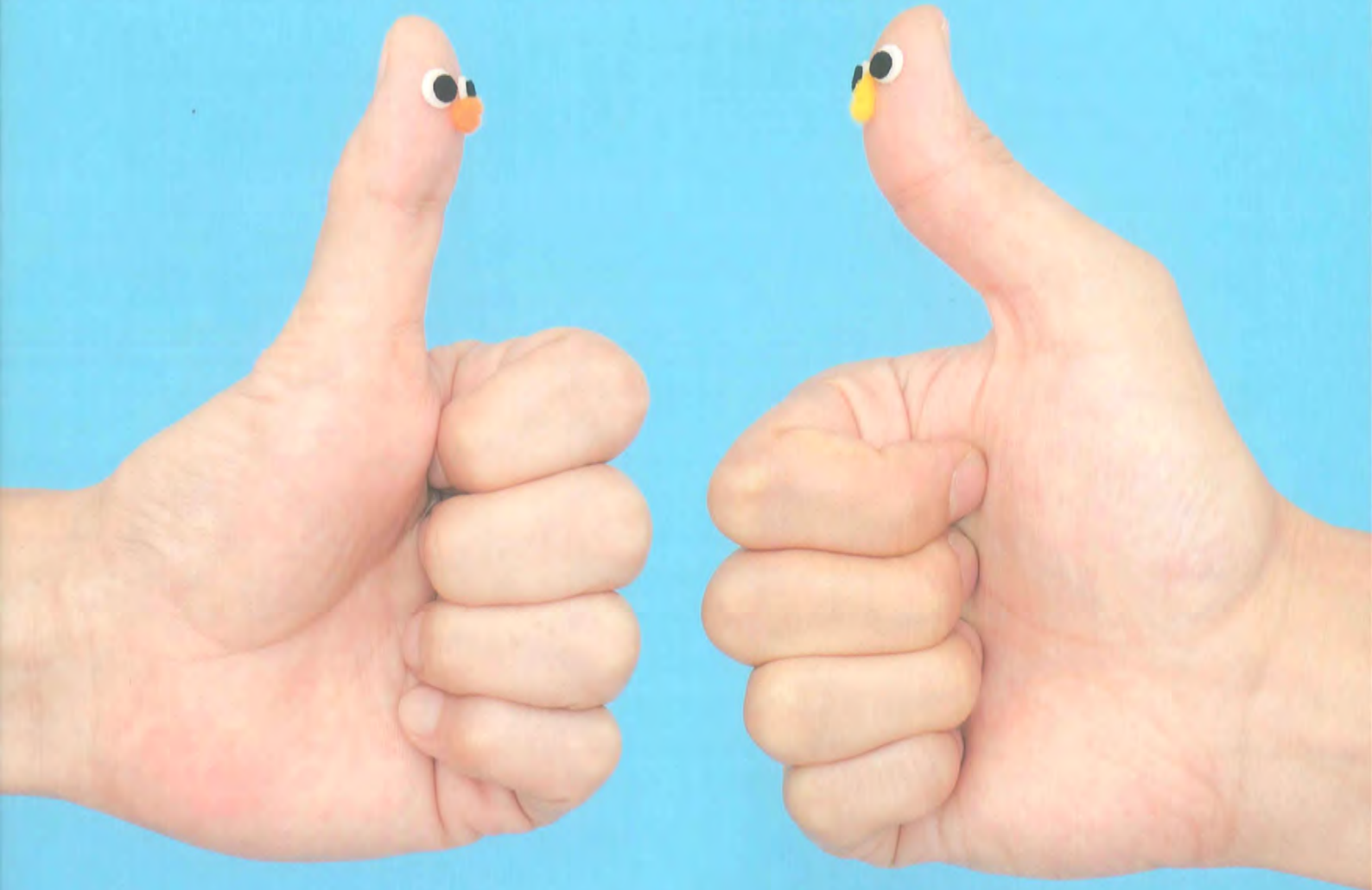
Works

どうする、人と組織。こうする。

108

2011.10-11
Works Institute

対話＝ダイアログで紡ぐ
人と組織の未来



連載

■経営者に聞く
進化する人と組織

医療法人社団 KNI
理事長
北原茂実氏

■成功の本質

B-1グランプリ

■CAREER CRUISING

いとうあさこ氏
(お笑い芸人)

■人事の哲学～中国古典の智～

■若手を腐らせるな

現場 ⇄ 研修 を
どう設計するか

RECRUIT



コミュニティを創り出し復興に貢献 対話から生まれる、真に喜ばれる支援

津波災害や原発事故など、東日本大震災からの復興を若者たちが自ら手で進めるため、被災地内外のNPOや個人が連携するコミュニティを創り出す——。ジャパンダイアログ・ユース合宿は、このことを目的に、西村勇也氏が代表を務めるミラック（NPO申請中）、キリスト教系の財団法人で震災の被災地支援にも携わるキープ協会、対話を活用して世界の貧困地域のコミュニティ形成を支援する米国のNGO、ベルカナ・インスティテュートが共催するプログラムだ。山梨県清里に、全国のNPOリーダーや個人ボランティアを各回50~60人集めて2泊3日の合宿に参加してもらう。全5回の開催を予定している。

合宿の目的は大きく3つ挙げられ

る。第1は短期的に、合宿参加者で被災者支援の具体的なプロジェクトを立ち上げること。第2はここで学んだ対話の場作りの手法を、各自の活動に生かせるようにすること。第3が冒頭でも触れた、合宿参加者でコミュニティを形成し、被災地支援のネットワークを中長期的に継続していくことだ。

初日と2日目は、活動内容や問題意識、なぜその活動に取り組むのかといったそれぞれの思いなどを、対話を通じて理解し合っていく。「最初は、『どんなことを期待してこの合宿に参加したのか』など、比較的浅いレベルの問いかけについて対話してもらう。プログラムが進むにつれて、『どんなことを人生で大事にしているのか』など、より深みのあ

る問いが立てられていきます」（西村氏）

他者との対話だけでなく 自然のなかでの内省も

他者の理解だけでなく、内省を通じて自己理解を深めることも意図されている。グループ対話の合間には、自然いっぱい広大な会場敷地内を散歩し思いを巡らせる時間がある。「グループで話したことを結局どう自分が受け止めたのか、振り返る時間も大切です」（西村氏）

このような対話や内省を2日間繰り返していると、参加者にはいろいろな変化が出てくる。被災地からの参加者でいえば、最初は被災状況に話が集中していたのが、徐々に自分の考えや思いを語るようになり、ほかの参加者の話にも耳を傾けるようになっていく。「被災地の人たちは、やはり傷ついています。他者の話に耳を傾けられるようになるには、互いに安心を感じ、信頼をもてる必要があります」（西村氏）

参加者は、安心と信頼を育むことで徐々にほかの参加者の話をよく聴くようになっていく。「本当に被災者のためになる支援は、まず当事者の話によく耳を傾けないと実現しません。このことを理解し、実践できるようになることは、後の活動の発展に必ず生きてくるはずですよ」（西村氏）

グループ全体にも変化は現れる。



西村勇也氏
ダイアログBar代表
ミラック代表理事



松浦貴昌氏
NPO法人プラストビート
代表理事

「合宿には参加者の子どもも一緒に来ています。いつの間にか子どもに気を配り、面倒を見る大人が出てきます」（西村氏）。それだけでなく、プログラム進行に必要な手伝いを買って出る人が現れるなど、仲間意識が芽生え、集団活動が円滑に進むよう、互いに気遣うようになってくるという。

このように参加者が1つのコミュニティとなる兆しが見えてきたころ、合宿は3日目を迎える。OST（13ページ参照）という手法を使い、「具体的にどんな活動をしていくのか」について対話を深めていく。この話し合いから、「プラストビート福島」という被災地の若者で音楽イベントを企画、実行する取り組みや、奥多摩で子どもキャンプを企画し、被災地の子どもたちを招待する試みが実際に動き始めている。「参加者たちはメーリングリストやフェイスブックを使って連絡を取り合い、時折実際に集まって対話も続けています」（西村氏）

本当の意味での多様性 体験できた3日間

5月のプログラムに参加した、NPO法人プラストビート代表理事の松浦貴昌氏は、「それまでに参加したどんな対話の場とも違って」と振り返る。「普通の主婦もいたし、対話している会場では子どもも走り回っていた。かつての集落の寄り合



清里の、自然豊かな合宿会場。草花に囲まれて、互いのストーリーを聞き合う場面も

いとか井戸端会議は、こんな感じだったのではないのでしょうか」（松浦氏）。それに比べると、以前参加したワールドカフェなどは、結局対話に興味のある、大企業のホワイトカラーにメンバーが偏っていたことに気づいた。「対話には多様性が大切だといいますが、本当の多様性を体験した気がします」

プラストビートでは、20歳までの若者たちに音楽イベントを自ら企画・実行してもらおう。スポンサー集めから会場手配、チケット販売まで期間限定の“イベント事業体”を経営し、それを社会人や学生ボランティアが支援するという活動だ。

参加の動機には、この活動をPRし、被災地で何かできないかという思いがやはりあったという。「ですが、参加してすぐに、NPOの代表としてではなく、一人の人間として発言し、話を聴きたいと思うように

なりました」。だからあまりNPOのことは話題にしなかった。にもかかわらず、たまたま宿舎で同部屋だった福島の若者と仲良くなり、プラストビートの話をしたことがきっかけで、結果として福島でも活動を展開することになった。

これまでも何度か東京以外の地方でプロジェクトを進めたことがあったが、いつも地元組織が独り立ちするまで、東京からかなりの支援が必要だった。「でも今回は、地元も含む合宿参加者たちが、支援だけでなく、ダメ出しもしてくれています」

何か大きな目的を、多くの、多様な人材で共有し、それぞれができることを持ち寄って、物事を動かしていく。ジャパンドialog・ユース合宿はNPOを中心とした取り組みだが、災害復興への取り組み、対話の活用のある仕方など、企業も学ぶ点が多い事例といえる。